

ムエタイの賭博化変容

本研究は、タイの伝統的な武術であるムエタイが近代スポーツとして誕生してから、賭博の影響によって如何に変容したか、を明らかにするものである。ムエタイ研究は、Peter Vail の博士論文や Pattana Kitiarsa の博士論文が先駆的な研究として知られている。彼らは、タイの社会と文化におけるムエタイの意味や役割、ジェンダー論などを論じている。しかしながら、古くからムエタイに付随してきた賭博やムエタイの身体技法の視点はその研究の中心からは除かれている。その点においては、研究課題が残された形になっている。本論の中心的な関心事は、まさにこの点にあり、ムエタイと賭博と技法・戦略との関わりからの考察から、ムエタイの文化を論じようとしている。以下に研究内容を章立てにより記す。

第一章 タイの概況と賭博

タイの歴史・文化とムエタイと賭博との関係が概観される。タイ王国は、その国民性や取り巻く環境などを考えた場合、元来賭博に寛容な国と言える。国民の約 95% が信仰するタイ仏教は、賭博を禁止の対象にしていない。また法律も、基本的に賭博行為を禁止するが、届出の賭博はこれを認めている。こうした状況の中で伝統的武術ムエタイも単なる伝統スポーツではなく、賭博の対象としてあり、またその文脈で語られる。実際に現在のムエタイスタジアムは、スポーツ競技場としての側面を持つのと同時に、賭博場の機能を強く持っている。

タイは貧富の格差の大きい国である。ムエタイ選手の大半は、タイ東北部出身者である。タイ東北部は特に貧困層が多く住む地域であり、若者たちがムエタイ選手として首都バンコクに出稼ぎに現れる。彼らの闘いが、ムエタイ賭博の在り方を大きく変えている。

第二章 ムエタイの変容

ムエタイが発生してから 1920 年代に近代スポーツとなり、その後タイを代表するスポーツに発展するまでの歴史的背景を追いながら、その変容過程が概観される。元来ムエタイは、護身術と見世物という二つの側面を持っていた。護身術であるムエタイは、仏教的な理念を伴って伝承されてきた。またその技法には、打突蹴の他、関節技なども含まれており、総合的な武術として行なわれていたとみられる。

一方、見世物としてのムエタイでは、強さを競うために、拳に紐を巻いて闘う方法がとられていた。第一次世界大戦前後に行なわれた前近代ムエタイでは、ムエタイのタイ文化性とタイ人の勇猛さを外国人に示す必要があったため、宗教的儀礼と勇猛さを強調する理念が求められた。後に、グローブを着用する様式が採用され、近代スポーツへと変容したムエタイは、タイのナショナリズムを背景に国民的なスポーツに発展し、強い選手は国民

の英雄となっていく。

第三章 ギャンブルムエタイ

国民的なスポーツに発展したムエタイは、しかしギャンブラーの増加と共にその姿を変貌させた。現在ムエタイは、様々な場所でギャンブルとして行われている。スタジアムの中だけでなく、テレビを見る観客さえギャンブルをするのである。こうしたギャンブラーの増加によってムエタイは採点基準などを変容させた。その結果、選手の小型化や若年化、打点位置が高い廻し蹴りと膝蹴りの奨励、さらにボディー・キャピタルの原理に則った独特の闘い方や技法、勝負観が形成され、現在のムエタイを特徴付けるものになっている。

結論

ムエタイは、戦場武術から出発して、ギャンブルを可能にするための文化装置と化した。ムエタイは、今日は、ボディー・キャピタルを損ねないように闘うことをよしとする特異なタイ文化として在る。